

---

## ロシア史研ニュースレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.94

July 2014

---

## ロシア史研究会2014年度大会案内

10月18日（土）、19日（日）

日本大学文理学部キャンパス（東京都世田谷区）

すでにお知らせしたように、ロシア史研究会 2014 年度の大会は、10 月 18 日(土)、19 日(日)の両日に日本大学で開催されます。

大会プログラムの概要をお知らせします。個々の報告の要旨については、次号に掲載予定です。

なお、大会にかんする事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局 ([tulbi5386\(at\)gmail.com](mailto:tulbi5386@gmail.com) ※(at)を@に置換) 宛にお送りください。



## 大会プログラム

### 10月18日(土)

	A会場	B会場
10:30-11:30	自由論題(1) 井上岳彦(札幌学院大学経済学部・非)「菩薩となったツァーリ：ドン・カルムイク人社会から見るロシア帝国」 コメンテータ：豊川浩一(明治大学) 司会：伊賀上菜穂(中央大学)	長谷川雄之(東北大学・院)「黎明期(1992-99年)のロシア連邦安全保障会議 - 『機能強化』の潜在性の検討 -」 コメンテータ：油本真理(学振特別研究員) 司会：小森宏美(早稲田大学)
11:30-13:00	昼食	
13:00-17:00 (休憩含む)	共通論題「冷戦とソ連の対外関係」 金成浩(琉球大学)「ソ連外交における安全保障観と国境(仮)」 佐々木卓也(立教大学)「アイゼンハワー政権の封じ込め政策と東西交流、1955-1960年(仮)」 藤沢潤(早稲田大学ロシア研究所招聘研究員)「1970年代ソ連の対外経済政策」 コメンテータ：松戸清裕(北海学園大学)、下斗米伸夫(法政大学) 司会：中嶋毅(首都大学東京)	
17:15-18:00	総会	
18:30-	懇親会	

### 10月19日(日)

10:00-12:00	パネル「19世紀後半より20世紀初頭における日露間の医療〈交流〉」 宮崎千穂(名古屋大学)「開港場長崎におけるロシア海軍医療と医学地誌の編成」 サヴェリエフ・イゴリ(名古屋大学)「第一次世界大戦時の日露協力と日本赤十字救護班のロシアへの派遣」 コメンテータ：バールィシェフ・エドワルド(東海大学・非) 司会：村知稔三(青山学院女子短期大学)
11:00-12:00	自由論題(3) 矢口啓朗(東北大学・院)「第2次シリア危機(1839~1841年)を巡るロンドン会議(1840年)におけるロシアの役割」 コメンテータ：池本今日子(早稲田大学・非) 司会：畠山禎(北里大学)
12:00-13:30	昼休み
13:30-17:00 (休憩含む)	共通論題「第一次世界大戦とロシア」 池田嘉郎(東京大学)「世界戦争の思想的地平線—ロシア・リベラルの欧州認識、1914-1917」 石井規衛(立教大学)「大戦下のロシア政治史再考(仮)」 佐藤正則(九州大学)「ロシア宗教哲学者と世界戦争(仮)」 コメンテータ：松里公孝(東京大学) 司会：土屋好古(日本大学)

## 【ロシア史研究会 5月例会】

合評会 富田武著『シベリア抑留者たちの戦後：冷戦下の世論と運動 1945-56年』（人文書院、2013年）

油本真理（日本学術振興会特別研究員）

5月例会は富田武著『シベリア抑留者たちの戦後：冷戦下の世論と運動 1945-56年』（人文書院、2013年）の合評会であった。同書はシベリア抑留の経緯をソ連の一次資料に基づいて明らかにした上で、帰還運動に際しての毎日新聞による報道、日本共産党の役割など、シベリア抑留というテーマに多面的にアプローチしている。論評は日本史の加藤聖文氏（国文学研究資料館）、そしてロシア史の麻田雅文氏（東北大学東北アジア研究センター）によって行われた。

まず、加藤氏により、日本史において取り上げられる抑留研究と関連する論点として「抑留者」と「引揚者」の違い、シベリア抑留の起源、南樺太・大連および中共からの引揚者との比較、抑留者たちの戦後史の可能性、が示された。その中でも、日本人とソ連体制との関係性がどのようなものだったのかを把握する際に民間人が残留し



た南樺太や大連との比較が参考になるとの指摘は大変興味深かった。続いて、麻田氏より、シベリア抑留の事例をより幅広い文脈に位置づけた場合にどのような可能性があるのかという観点から示唆に富む報告が行われた。具体的には、シベリア抑留を当時の米ソ関係を軸とした国際政治に位置づける視点の重要性、ソ連史からみた捕虜の扱い——捕虜の労働力への転用と共産主義の教化——、そして、ソ連の占領地統治という文脈を共有するポーランドとバルト三国の事例との比較の可能性などが挙げられた。

これらの論評および著者である富田氏からのリプライを受け、フロアからは、シベリア抑留から明らかになるソ連体制とはどのようなものなのか、そして、他の類似事例と比較した場合のシベリア抑留の特殊性はいかなる点に見出させるのか、などの大きな論点が次々と提起され、刺激的な討論となった。また、今回の例会では実際にシベリア抑留を経験された方の体験談をうかがう機会に恵まれたことも付記しておきたい。元抑留者の平均年齢が91歳に達しているとのことで、聞き取り調査が物理的に困難になりつつある中、こうしたチャンスは大変貴重である。その反面、抑留者（およびその関係者）の多くは帰還後自らの体験を語る事が難しかったという事実もある。例会の結びの言葉として、今後は「抑留者の戦後」の社会史に取り組むつもりであるとの表明が富田氏

からなされたが、これは今まさに機が熟しつつある研究テーマであるように思われる。研究のさらなる進展が待ち望まれる。



### 【ウファー国際学術会議参加記】

豊川浩一（明治大学）

ウファーで開催された国際学術会議「歴史的文化的広がりにおける個人の役割（バシキール人の民族的英雄にして即興詩人サラヴァト・ユラーエフ〔生誕〕260年に寄せて）」（2014年6月3-5日）に参加した。バシコルトスタン大学の主催、バシキール文学・フォークロア・ジャーナリズム講座の運営で、協賛に名前を連ねていたのはバシコルトスタン科学アカデミー、同教育省、ロシア連邦文部科学省青少年養育部門国家政策局である。この民族の英雄サラヴァトについては不明な点が多く、6月16日がサラヴァトの誕生日とされているが、史料的には不明である。裁判記録によると、1754年6月から10月の間とされている。祭典サバントイは6月一杯続くことになる。

総会前日の3日には、歴史学講座主任A.И.アクマーノフによって開かれた教員・学生との懇談会に出席した。日本とロシアの大学教育や学位取得のシステムの違いから研究に至るまで質問や意見が出た。特に1730年代のオレンブルク遠征を研究している若いM.M.ズリカリナエフと知り合えたのは私には収穫であった。彼は、オレンブルク遠征隊の目的の経済的意味や原因は何か、また私が「農民戦争」と「叛乱」という用語をプガチョーフ叛乱研究で区別する意味はどこにあるのか、という質問をしてきた。講座主任の父親でもあるバシキール人蜂起研究の第一人者И.Г.アクマーノフの質問と同様にソ連時代の思考方法を継承しているようにも思える質問であったが、若い世代の登場である。なお、バシコルトスタンの歴史を掘り起こしながら新たな分野を切り開いてきたA.З.アスファンジャーロフがこの2月に死去したことを知った。

4日10時に大講堂で始まった総会は、バシキール人の伝統楽器クライ（葦でつくられた日本の尺八に類似した民族楽器）の見事な演奏で幕を開けた。サラヴァトの即興詩に曲をつけたものである。曲は民族にとってはいわば「国歌」であるため全員が起立する。次いで登場した民族衣装に身を包んだ大学生3人が同じくその曲を歌で披露。サラヴァトの詩やゆかりの自然の風景が正面スクリーンに映し出されていた。

20世紀初頭のバシキール文学の傾向について述べた文学者に続く私の報告は、「プガチョーフ叛乱研究の現状」と題するものであった。ソ連時代から現在までの研究史を振り返り、とくにИ.М.グヴォズジコヴァの研究をサラヴァト研究の最高峰として位置付けて紹介しながら、プガチョーフ叛乱研究が抱える問題点について述べた。続くM.M.クリシャリポフはソ連時代から継続している自身のテーマを「バシキール人民族

運動とその現代的解釈」という題で、近年物故した P.Γ.クゼーエフの説を援用しながら 17 世紀から 20 世紀までのバシキール人民族運動を 4 つに時代区分してその意味を問いつつ、それをどのように考えたらよいかを若い歴史家の批判に反論する形で紹介した。社会学者 P.M.ヴァルナフメートフ「バシキール人の民族意識形成と発展の基本的基準と事実」は多くの図表を用いてアクチュアルな問題として民族意識形成の過程を紹介し、P.A.ハジーエフ「17～18 世紀におけるバシキール民族の英雄たちについての歴史的記憶」は「記憶」についての世界的な研究動向に結びつけた。ともに若い世代の報告として興味深かった。



昼食後には旧知の言語学者に誘われて近くの教育大学で教員や学生を前に話をした。特に印象深い質問は著名なバシキール人文学研究者からのもので、バシキール人の歴史は蜂起や叛乱が他の民族に比べて極めて多いが、その理由や原因はどこにあるのかというものであった。これは私自身が日ごろ考えていたことで、思わず「あなたはどうか考えるか」と問うたほどであるが、以下のような私の考えを披露した。バシキール人の蜂起や叛乱の多さは、16 世紀のイヴァン雷帝による「併合」以来、当初の「契約」とは異なっており、徐々にロシアによる強圧的な支配がなされ、特に入植してきたロシア人が思うが儘に土地所有権を打ち立てた。こうした入植のありかたをバシキール人は明白な「契約」違反として頻繁に立ち上がった。しかし、完全にロシアの支配下に入った 18 世紀末以後も自由や自主性を保持しようと努めつつ、今度はかつての蜂起や叛乱の時に経験した厳しい鎮圧を避けるためにも、ある意味では現在に至るも、政府に対して明確に反対するという意思表示を示さず、むしろ積極的に政府の意向を体現してきた点にバシキール人の歴史の複雑さがあるのではないだろうか、と。聴衆の完全な賛意を得たとは思われないが、その時まで考えていたことを述べたつもりであった。また先の文学研究者による、帝政時代末モスクワ大学学長を務め、革命後にウファに流された歴史家 M.K. リュバーフスキーによるバシキール人蜂起の研究についてはあまり研究されてはいないのではないかという質問も重要であった。確かに表面上はそのようにみえるが、先のアクマーノフ親子はレーニン図書館手稿部に所蔵されているウファ時代に残したリュバーフスキーの原稿を読み研究していること、また同じく私も研究し小論（『窓』133 号、2005 年）を書いたことなどを紹介した。

5 日にはエクスカッションが催された。サラヴァトゆかりの地を尋ねるべく、ウファ

一から北東へ 180 キロ以上離れたサラヴァト地区の中心地マロヤズ、およびその近郊を訪れた。18 世紀トヴォルドゥイシエフたちによって建設されプガチョーフ叛乱の激戦地となったシムスキー工場跡（現在はチェリャービンスク州）を車窓から眺め、サラヴァトが政府軍から逃れて身も心も休めたであろうユリュザン川、洞窟、森、ステップなどの大自然を堪能する大遠足であった。

## 【ロシア史研究会委員会より】

### ＜名簿担当からのお知らせ＞

前号のニューズレターに名簿作成用アンケートを同封しましたが、アンケートに記載している yahoo group のメールアドレス（前・委員会宛アドレス）が、5 月 28 日をもって使用できなくなりました。関係する皆様にはたいへんご迷惑をおかけしました。

今後電子メールにて変更等をお知らせいただくときは、事務局のメールアドレスにお送りください。

### ＜例会のお知らせ＞

次回の例会は 9 月 20 日（土）に青山学院女子短大本館 2 階小会議室で開催される予定です。

### ＜新会員の紹介＞

2014 年 4 月～6 月の新入会員（1 名）をお知らせします。

梶 さやか（2014年4月16日入会）

所属：岩手大学人文社会科学部

専攻：19世紀ロシア帝国領旧ポーランド＝リトアニア地域

-----  
ロシア史研ニューズレター  
第94号 2014年7月13日発行  
編集・発行 ロシア史研究会委員会  
（立石洋子、金山浩司）  
〒169-8050  
東京都新宿区西早稲田1-6-1  
早稲田大学 教育・総合科学学術院  
小森宏美研究室気付  
-----